カーリングには熱心。高校生の時、ユーコン地区大会のボン・スピール（カーリングの競技会）で優勝して以来、何度も優勝カップを手にしている彼は、一九七八年、北海道池田町のボン・スピールに参加したことがきっかけで日本のカーリング全般にわたり指導することになった。日本のカーリング人口は現在では約二万人にふえた。今年中に日本カーリング協会を設立し、北海道、富山、長野、名古屋に支部を設ける予定になっている。テッドは、一九八四年中には国際カーリング連盟に日本も正式加盟できるよう、コーディネイターとして活躍中だ。加盟のあかつきには、一九八五年のスコットランド世界選手権に参加するというのが、日本のカーラーたちの夢である。

（東京銀座・兜屋画廊）

ジョン・マギー

茶道に魅せられて裏千家師範に

南　良成

京都裏千家に多年修業するカナダ人がいる。ジョン・マギーがその人である。ジョンは一九四八年、トロントの牧場主の家に生まれ、長じて大学を卒業するまで、日本とは全く無縁の生活を送っている。ヨーク大学では将来家業を継ぐべく牧畜関係のことを学んでいた。

その彼が来日するに至った経緯は、ほとんど偶然の賜物と言ってよい。ジョンが卒業した一九七〇年は大阪で万国博覧会が開催された年である。この折、オンタリオ州政府はカナダ館とは別個にパビリオンを開設するにあたって、二十五人のコンパニオンを国内で公募した。ジョンは幸運にも採用されたが、当時の彼は日本の文化はおろか、日本語も全く知らないし、動機も「なんとなく東洋へ一度行ってみたい」という曖昧なものであった。

マギーさん

ジョンと茶湯の出会いは、この半年のオンタリオ館勤務の時期のことである。彼は喧噪たる大阪の町に住み、いわゆるカルチャーショックを経験することになる。それまで広々としたカナダの町でのんびり暮してきたジョンにとって、毎日十数万の単位で日本全土から訪れてくる人々に囲まれ、サインや握手を求められる環境は、気も狂わんばかりの状況であったらしい。

雑踏を逃れ少しでも息苦しくない静かな空間を求めて、彼は偶々オンタリオ館近くにあった日本庭園を散策し始めた。そしてある日、その庭園の中に小さな家屋を見つけて、そこへ足を踏み入れたのである。それが茶室であったわけだが、勿論、当時のジョンはそれが何をするための建物であるかも全く知らずに訪れたのである。

が、彼は茶室の静寂な雰囲気の中で温かい接待を受け、たちまち茶湯に魅了され、その後、何度も茶室に足を運ぶようになった。

大阪万国博覧会が閉幕し、任用期限の切れたジョンは、まず姫路に移り住み、焼き物（備前焼）の勉強を始めている。同時に彼は、茶湯を学ぶために姫路から約三十分ばかり離れた竜野の町へ通うことになる。やがて彼は茶湯をさらに本格的に勉強するために京都へ居を移し、直接、裏千家家元の門を叩く。知己の紹介もなく直接家元の門を叩くこと自体異例のことなのだが、この時も運よくジョンは翌日から入門を許可されている。

裏千家家元での茶道の修業は比類ないほど厳しいものである。早朝一時間の座禅に加えて、昼食時の一時間を除いて午前九時から午後四時まで、稽古につぐ稽古である。正座に慣れていない外国人のジョンにとっては、一日六時間にも及ぶ正座は想像を絶する苦業であった。凍りつくような冬の日、肌も焦げ付くような夏の日、冷暖房設備など一切無いところで何時間もの稽古が続くのである。ジョンは述懐する。「私は、遥々カナダからやって来て、何故このような苦労をしなければならないのか。自分は一体何のために茶道を学んでいるのだろうか。こんな疑問にとらわれ、何度止めてしまおうと思ったかも知れない」と。

裏千家家元に入門して十二年の歳月が経ち、彼はついに千宗匠から師範の茶名を授けられる栄誉に浴することができた。一九八二年二月十八日午前八時、ジョンはただ一人、利休堂に導かれ、千宗匠から利休像を紹介され、その眼前で、「千宗悠」の茶名と千家の家紋を使うことを許されたのである。古今、茶道に関心を抱いた西洋人は少くないが、ジョン・マギーほど実際に茶道の世界に没入し、十数年の修業を生身で体得した西洋人はほかにいないであろう。

現在、ジョンは裏千家家元付きの専属通訳として活躍している。四年前、宗室氏がハワイで講演を行なった際、ジョンは初めて家元の通訳をつとめた。彼にとっては仕方なく引き受けた通訳であったが、講演は成功裏に終わった。日本古来の伝統文化の精神を他国で説明することは難しい。茶道精神を語る言葉――侘び、やつし、不完全の美、余情、一期一会等――を自信を持って通訳できる人が果たして何人いるだろうか。こうした言葉を通訳するには、その基礎に茶道精神に対する深い理解と造詣がないことにはとても不可能である。この意味で、まさしくジョンは千宗室氏の講演通訳者として最適任者である。茶人及び通訳者としてのジョンに対する家元の信頼は厚い。このこと